

まえがき

ナシヨナリズムの復活と右翼ポピュリズムの成功によって、民主主義の基盤と危機をめぐる新たな議論が始まった。伝統ある西洋の民主主義諸国においても、自らが拠って立ち、つい最近まで受け入れられていた政治的な基本合意^{コンセンサス}が、もはやそれほど自明のものではなくなっている。そしてドイツでここからすぐに連想される歴史といえば、ヴァイマル共和国である。ここドイツでは、ヴァイマル共和国の没落が、民主主義の喪失という劇的な歴史的経験となっているのだ。とはいえ、「ヴァイマル状況」^{†1}〔現在のわれわれが置かれている状況は、ヴァイマル共和国の状況に似ている〕といった場合、何が本当に問題となっているかは、決して明瞭ではない。ヴァイマルはどれくらいわれわれの時代と類似しているのだろうか？ いかなる歴史的経験があり、そこからわれわれは現代のためにいかなる推論を導き出せばよいのだろうか？

こうした問題や省察が本書の出発点であり、二〇一七年初頭に編者のあいだで対話を重ねてアイデアを発展させていった。喜ばしいことに、このテーマに関する正真正銘の専門家たちが本書への

寄稿を快諾してくれた。検討されるテーマは、政治文化〔第1章〕、メディア状況〔第3章〕、政党システム〔第2章〕、有権者のプロフィール〔第4章〕、経済状況〔第5章〕、国際環境〔第6章〕である。くわえて、外国からのまなざし〔第7章〕を補充することにした。本書に収められているのは、二〇一七年四月から七月までバイエルン放送（BR）でラジオ放送され、かつ『フランクフルター・アルゲマイネ新聞』〔FAZ〕に掲載された原稿に加筆修正したものである^{†2}。

われわれ編者は、本書刊行に迅速に対応してくれた寄稿者たちとレクナム出版にまず感謝申し上げたい。また、企画を実現するにあたって協力・支援を惜しまなかったダニエル・デッカーズ（FAZ）、アンケ・マイ（BR）、ジモーネ・パウルミヒル（現代史研究所）にも感謝したい。ドイツの最初の民主政が誕生してから一〇〇周年を機に、本書が多くの読者を得ることを願って。

アンドレアス・ヴィルシング

ベルトルト・コーラー

ウルリヒ・ヴィルヘルム

†1 『ヴァイマル状況？（Weimarer Verhältnisse）』が原書
究所のサイトから閲覧可能である。 <https://www.ifmuenchen.de/aktuelles/themen/weimarer-verhaeltnisse/> [110]

†2 新聞掲載時の原稿は、以下のミュンヘン現代史研

一九九四年一日閲覧

目次

まえがき

A・ヴィルシング／B・コーラー／U・ヴィルヘルム

i

第1章〈政治文化〉 理性に訴える

アンドレアス・ヴィルシング

1

第2章〈政党システム〉 敵と友のはざままで

ホルスト・メラ

17

第3章〈メディア〉 政治的言語とメディア

ウーテ・ダニエル

33

第4章〈有権者〉 抵抗の国民政党

ユルゲン・W・ファルター

51

第5章〈経済〉 ヴァイマル共和国の真の墓掘人——問題の累積をめぐって

ヴェルナー・プルンペ

71

第6章〈国際環境〉 番人なき秩序

——戦間期の国際紛争状況と軍事戦略の展開

ヘルフリート・ミュンクラー

87

第7章〈外国からのまなざし〉 不可解なるドイツ

エレヌ・ミアル＝ドラクロー

101

おわりに 警戒を怠らないということ

アンドレアス・ヴィルシング

117

ヴァイマル共和国略史

131

訳者あとがき

139

編著者・訳者紹介

152

〈凡例〉

- 一、原文の（ ）は訳文でも（ ）とした。（〔 〕）は訳者による補足である。
- 二、各章末には、訳者による注を付した。

第1章 〈政治文化〉

理性に訴える

ある幽霊がドイツ人の議論に忍び込んでいる。「ヴァイマル状況」という幽霊である。それは、歴史の物置のなかに永遠に仕舞い込まれたと思われていたものだった。われわれのデモクラシーは不安定化しているのだろうか？ 挫折したヴァイマル共和国と同様の危険が差し迫っているのだろうか？ 極右の成功が目前に迫っているのだろうか？ これらは、とうの昔に回答済みと思えた古い問題が、装いを新たにして登場したものだ。というのも、ボンはヴァイマルではなかったし、現在のベルリンもけっしてヴァイマルではないからである。しかし^{↑1}実のところ、長きにわたってドイツ連邦共和国は、自らのデモクラシーの安定をたしかなものにするために、ある種のネガティブな引き立て役を必要とした。ヴァイマルは、デモクラシーの権力喪失と自己放棄についての典型的な教材だったのである。遅くとも一九八九／九〇年の東西ドイツ統一のち、このヴァイマル像は意味を失った。伝統が成熟し、市民社会の基盤が安定したことによって、そしてまた、まったく新し

いグローバルな挑戦によって、ヴァイマル共和国の歴史はその歴史的・教育的な機能を喪失したのである。ドイツのデモクラシーは、自らの政治的な正統化のために、もはやヴァイマルの歴史を必要としなくなったように思えた。

しかしここ三年ほど、誰もがヴァイマルについてふたたび語り始めた。伝統的な確信が疑問にさらされ、新たな不安が生み出される時代において、「ヴァイマル状況」が恐怖をかき立てるイメージとなったのである。有権者と統治者とが、あるいは人民とその代表とが、ますます疎遠になっていくようにみえる。「人民の裏切り者 (Volkverräter)」や「嘘つきメディア (Lügenpresse)」といった言葉（いずれもナチが用いた言葉）が暗い記憶を呼び覚まししている。

とはいえ、こんにちヴァイマルが言及されるとき、それが実際のところ何について語っているのかは、それほど明瞭ではない。それゆえ求められているのは、歴史が伝える危険はいかなるもので、それに対してわれわれはどのように備える必要があるのか、そして、過去の幽霊のどれをわれわれは実際に歴史の物置へと追いやることができるのか、といった問いの答えを十分に明らかにするような、歴史学にもとづく専門調査である。本書に収録された論考は、こうした批判的な調査に取り組むものである。対象となる問題は、経済状況〔第5章〕、政党システム〔第2章〕、メディア〔第3章〕、有権者行動〔第4章〕、国際関係〔第6章〕、そして外国からのまなざし〔第7章〕である。

これらはどれも歴史研究の重要なテーマであり、そのいずれもヴァイマル共和国がなぜ崩壊したかの重大な理由を含んでいる。一九三三年の出来事〔ヒトラーの政権掌握〕について唯一の原因を



図1-1 「嘘」。ラインハルト・シューマン作のポスター、1920年。

求めることは無茶な試みであり、誤解を招くだろう。くわえて、なぜヴァイマル共和国が最終的に右からの攻撃に屈したのかについては、研究者が「政治文化」と呼ぶものを考察することなくして説明することはできないだろう。そこで、当時と現代における同時代人ないし有権者たちのイメージ世界と思想的態度について、若干の考察を加えていこう。

ヴァイマル共和国の政治文化の際立った弱点は、社会が多元的であることの正統性に対する根深い不信である——それは、分裂した「政党国家 (Parteienstaat)」としてヴァイマル共和国を激しく拒否するような態度にみとることができる。逆にこうした態度は、統一性へのイメージを喚起するが、それもまた議会政治の実践にマイナスの影響を及ぼした。というのも、多くの政治家の理想が、諸政党から超越した(ようにみえる)政府という考

えにとどまったからである。そうした理想の模範は大連立、すなわち社会民主党から、「かつてビスマルクを支えた」国民自由党の後継政党であり、大工業家に支えられたドイツ国民党(DVP)にいたる連立政権だった。しかし、こうした理想は諸政党に過大な妥協を要求し、大連立が議会制の規範として高められれば高められるほど、ヴァイマル共和国の議会制の機能不全に寄与してしまうことになった。さらに有害なのは、こうした根底にあった態度が、共同体イデオロギーにとりわけ傾きやすかったことである。このイデオロギーは、共同体の攪乱者や敵さえ排除すれば、国民の統一性は達成されると主張するものであった。

こうした考え方の蔓延は、政治的極端主義を助長し、デモクラシーを危険にさらした。歴史がわれわれに教えるように、たとえば経済的苦境のみが政治的急進主義の原因というわけでは決してない。しかし、経験可能な世界と自らの実情とのあいだの不一致が大きくなると、怒りや抗議の念、除け者にされているという感情、自分は「エスタブリッシュメント」の犠牲者であるという感覚が生じる。そうした感情は、デマゴグや扇動者たちによって利用され、強められ、上に対する激しい不満の波を引き起こす。

これが、いま話題のポピュリズムの仕組みである。ポピュリズムについては、次のように厳密に定義する必要がある。ポピュリストたちは、民主主義社会の政治的・社会的および文化的な多様性を拒否する。彼らは、憲法に則って表明される政治的意思とはまた別に、もうひとつの、「真の」、「本来の」、統一された人民フォークが存在すると主張し、彼らこそがそれを代表しているのだと——偽りを

——申し立てる。それゆえ、ポピュリストたちの言語はつねに人民を志向しているものの、似非民主主義的なものである。自分たち以外の人びとの意見、生活様式、そして民主主義的な決断を否認するからである。ポピュリストは、複雑な現実を政治の出発点にすることを拒否する。その代わり彼らは、現代社会の紛争を似非道徳的な厳格主義のカテゴリーに押し込める。この厳格主義を突き詰めると、罪人と犠牲者しか存在しない世界となる。経験と理性にもとづいた多元主義的な世界像に代わって、友敵対立の世界像が立ち現れるのである。

このように定義されたポピュリズムは、政治的に急進的なものであり、政治的極端主義との境界線は曖昧なものとなる。その点でいえば、政治的な「エスタブリッシュメント」に対する憎悪のレトリックは、あらゆるポピュリストのおよび右翼急進的な潮流の基本的な武器である。

このように政治的な議論を友と敵の対立に単純化するやり方は、複雑さを増し、匿名の勢力に支配されているようにみえる世界においては、つねに魅力的なものとなる。そして、そうした近代に特徴的な認識のかたちや矛先は、具体的な文脈や状況で変化する。市場の影響力が重要な場合もあれば、国家間の権力体系の影響が重要なときもあるし、資本や労働運動といった社会勢力も関係する。共通しているのは、それら市場や国際システムや社会勢力などが抽象的で得体的（モラル）のみにみえること、しかしその影響力は紛れもなく具体的なものであり、不安を引き起こすことである。

抽象的なものを単純なスローガンで説明し、具体的な苦境について具体的な責任者を名指しする

いていく多くの事態が重なりあって生じるが、それらはしばしば政治的・文化的なアイデンティティ形成とかわわっている。強固な自己認識としてのアイデンティティは、何かに所属しているという感情を抱くことを可能にするものであり、自己を取り巻く環境と有益な関係を結ぶための決定的な前提条件である。しかし政治的・文化的な大変動の時代においては、方向感覚が次第に失われ、伝統にもとづいた確実性が霧消する。こうなると、既存のアイデンティティが文化的な変動にさらさ



図1-2 「戦場では負けていない」——1924年の国会選挙におけるドイツ国家国民党 (DNVP) の反社会民主党 (SPD) および反中央党のキャンペーン。

ような、責任転嫁への欲求が高まる局面・情勢は、歴史上繰り返し返されてきた。われわれはそれを、たとえばフランス革命の歴史や、一九〇〇年前後のヨーロッパ史から知ることができる。そうした歴史においてはた

れる一方で、新しいアイデンティティははまだ根付いていないか、新たに創り出されねばならないものとなる。ここで、脅かされているというシナリオが登場する。アイデンティティの不安定さに、経済に起因する社会的立場の不安定さが付け加わる時、政治的急進主義の主要な歴史的条件が揃うこととなる。

ドイツでは、すでに第二帝政時代〔一八七〇—一九一八年〕から、アイデンティティは、宗派の分裂、遅れた国民形成^{ナショナル}、深刻な社会的対立、世界政策への誘惑によって刻印され、不安定で壊れやすいものであった。さらに第一次世界大戦後、多くの犠牲を払ったにもかかわらず、過去の厄介な確信——国民的な権力国家、登りつめた繁栄、国際的な威信——が突然消滅した。そして一九一八—一九年の革命は、貴族およびブルジョアのエリート層から、彼らのアイデンティティの拠りどころであった君主制を奪った。また革命は、彼らが脅威と感じていた労働者運動に水門を開いたようにみえた。労働者運動は、「マルクス主義的」、「ボリシェヴィズム的」、あるいは「ユダヤ的」といった烙印を押され、それと同時に交戦国に対してドイツ人を無防備にしたと思われた。

これらの思い込みはすべて、現実とはほとんど関係がなかった。戦争はドイツのエリート層の大部分が望んだものだったし、実際に交戦国側が優越していたからこそ敗北したのである。革命が勃発したから敗戦したのでは断じてなく、むしろ戦争に負けたからこそ革命が始まったのである。しかし、ナショナルに考える人びとにとって、冷静かつ建設的に敗北に向き合うことは、過大な要求であった。ホーエンツォレルン家の君主制は、自らが退場することで、自身の改革能力のなさを贖

つた。それに対して、多数派社会民主党（SPD）の労働者運動は改革志向であった。彼らは革命を法治国家的な方向に導こうとし、自らが左翼急進主義的な潮流に対する防波堤であることを示した。それゆえヴァイマル共和国の歴史は、深い失望と激しい認知的不協和とともに始まった。きわめて多くのドイツ人にとって、自らのアイデンティティはひどく傷つけられ、他方で新しい、共和主義的で民主的なアイデンティティを発展させるには時間を要した——そしてそうした時間は、インフレーションや世界恐慌に起因する長期的な経済的苦境によって不足していたのである。

こうした背景のもと、急進的なナショナリズムと、自国内に仕立てられた敵への攻撃が、イデオロギー的な着地点となった。それは、大小のデマゴグたちが、明快な友敵プロパガンダを用いて民族至上主義的でナシヨナリスティックなアイデンティティを構築し、それによって成功を収めることを可能にした。個々の集団が、自らのプロパガンダのなかで、擬制的ではあるが、統一された「真の」^{フォルク}人民を形成し、それをヴァイマル共和国の憲法に則った意思形成過程と鋭く対置した。それに応じて、「他者」との憎悪に満ちた差別化も生じた。「真の」人民が体現する善、普通さ、健全さが、経験可能な世界の悪、異常、病と対置された。経験可能な世界の複雑さは、そうしたイデオロギー体系によって単純化され、同時に「説明された」。事實は否定されるか、「もうひとつの事実」に取って代わられた。その限りで、すでにヴァイマル共和国は「ポスト真実」^{トールス}的な時代現象に對峙していたのである。

この点でアドルフ・ヒトラーは格好の事例といえよう。一九二七年に彼は、近代の政治的・社会

的世界は複雑であるという単なる言明ですら、民主主義者の悪意あるプロパガンダだとして退けた。ヒトラーはそうした言明を公的生活の人工的な「複雑化」[†]だとして、民族の「自然の生存法則」や「自然の本能」をそれに対置した。さらに、ヒトラーや民族至上主義的なナシヨナリストたちが時代の喫緊の問題に与えた回答は、単純かつ不誠実なものだった。多くの者にとって不可解だった第一次世界大戦の敗北について、彼らは裏切りや「背後からの一突き(Dolchstoß)」という主張を用いて説明したのである。彼らからみれば、民主主義政党はどれも腐敗した一味にほかならず、議会は人びとを欺き、議員たちの私腹を肥やすための虚偽に満ちたお飾りだった。また彼らは、リベラルな新聞を「アスファルト新聞」[†]だとか「ユダヤ人新聞」だと罵った。グスタフ・シュトレイゼマンのような合理的で漸進的な改善をめざす外交政策の代表者は、戦勝国によるドイツ民族の奴隷化を目論んでいる国家の裏切り者だとして、中傷された。さらに彼らは、一九三〇年以後の世界恐慌は、自民族の殲滅をめざした「体制政党」のせいでは起きたものだと言張したのである。

現在のわれわれの状況とヴァイマル時代の状況との違いは明白かつ顕著だろう。ドイツ連邦共和国は、長きにわたって築かれた伝統を手に行っている。連邦共和国は国内外を問わず権力国家的な要求に規定されてはおらず、恐るべき独裁と戦争と犯罪の経験によって刻印されている。いまや七〇年近くにわたるその歴史は進歩の歴史として語ることができるし、多元的な民主主義が自らのアイデンティティであるという考えは揺るぎないようにみえる。旧東ドイツの領域が連邦共和国に編入されてからも、[†]ヴァイマル共和国が存続した期間のほぼ二倍の年月が経った。それゆえ旧東ドイツ

地域の住民の大部分は、すでにドイツ連邦共和国のデモクラシーに慣れ、それに適応している。

では権力問題はどうか？ その点についてもまた、現在は一九一八年以降の時代とはまったく異なっている。ヴァイマル共和国では、大部分の政治エリートが共和国に対して、敵対的とはいわずとも、基本的に懐疑的だった。彼らの部屋の机の引き出しには、憲法の代替案が用意されていた。それに対して現在のドイツでは、官職や議席は民主主義者たちの手中にある。連邦や州、あるいは行政や司法の重要なポジションを占める専門家たちは、義務というよりも確信から、多元主義的なデモクラシーと結びついているのである。

では、なぜわれわれのデモクラシーの安定性について不安が生じているのだろうか。それは、主に政治的な言語の変化による。そして、この事態は憂慮すべきものだ。ここ数年で、公的に発言できることの境界線が明らかに移動した。ナシヨナリズム、保護主義、そして——自国の侮蔑者から守るべき——「真の」人民の言語を話すことができる余地が開かれたのである。こうしたプロパガンダ的な武器は、その急進性によって民主的な意思形成の基本原則を攻撃するものだが、それが影響力を増している。そして、まさにそれらが見覚えのあるものだけに、ヴァイマルの空気を現代に運んでいるのである。

もちろん、こうした現象はすべての西欧の民主主義国に当てはまる——民主主義が確立されてから間もない東欧・南東欧諸国やトルコについてはいうまでもない。この点で、戦間期との類似性が認識できよう。戦間期には、ファシズムとナチズムが、ヨーロッパにおけるデモクラシーの全般的

な危機のなかで、犯罪的なまでの極端さを示していた。また、たしかな伝統の感覚が失われ、アイデンティティや地位が不安定となった新たな時代にわれわれが突入しているという徴候も、間違いなく存在する。この点も、われわれが両大戦間期から完全に遠ざかっているわけではないことを思い起こさせる。

近年、いわゆるグローバル化が、それ自体は匿名の抽象的な現象であるものの、きわめて具体的な不安を生じさせている。グローバル化に含まれるのは、世界大の金融・通商の流れ、文化の平準化、新しいコミュニケーション様式、そしてもはやほとんど統御不能な世界規模の移民の動きである。さらに、冷徹な競争や競争の掟もそこに加わるだろう。自分の職が奪われることへの脅威としてせよ、一生訓練を続けることへの要求としてせよ、こうした掟は、ほとんどいたるところに存在する。この競争の掟は、個人の人生計画に影響を及ぼし、グローバル化の標準音として、ほぼ丸々一代にわたって、個人、国民、社会集団の生活の隅々にまで響き渡っている。そして、それによって生じた変化が、過去の政治的・文化的な明瞭さや経済的な安定が与えていた既存のアイデンティティを圧力にさらしているのである。他方で、たとえば国境横断的、ヨーロッパ的、多文化的な新しいアイデンティティは、いまだ十分に定着していない。経済、社会、文化にもとづく地位をめぐる不安が、その帰結である。

こうした背景のもと、見通すことが可能な単位に立ち戻ることが、きわめて魅力的なものとなった。ナシヨナリズムや一國保護主義が、多くの人びとの過剰な負担に対処するための最も簡単な道

具となつてゐる。第一次世界大戦後の一九一八年以降と同様に、それらが、現実世界の複雑さを克服するための、わかりやすい防衛策となつてゐるのである。ペギーダ^{†4}や「ドイツのための選択肢（AfD）」の一部、そしてそれらの「同調者たち」は、そうした流れを歓迎してゐる。そして、もし彼らが「真の」人民というフィクションでイデオロギーを満たすならば、すぐさま陰謀論や、「人民の裏切り者」「嘘つきメディア」といったプロパガンダ的言説に行き着くだろう。

こうした傾向は危険である。そして、その傾向が投票行動を規定し、それによつて既存の政党システムを変えたとしたら、より一層危険である。ナチズムの興隆は、ドイツの政党システムにおける自由主義的および保守主義的な支柱が溶解したからこそ可能になつたのであつた。それゆえ、ドイツで新たに分極的な多党制が展開し、統治が困難になることへの懸念が生じるのも無理はない。分極的な多党制から生じる中道化の傾向、たとえば大連立政権になりがちなこと——これもヴァイマル共和国と類似する点だが——は、政治的な振り子現象にもとづく整然とした政権交代という議会主義のロジックとは相容れないものである。そして、互いに決して同質ではありえない中道の権力ブロックの周辺に新たな野党が登場することになるが、それは反議会主義的および反民主主義的な勢力となりやすいのである。

こうしたことを軽視するのは、ドイツの戦後民主主義の安定性についてあまりにも自惚れてゐるといわざるをえない。民主主義の最も重要な果実としての自由は、きわめて貴重な財産なのであり、われわれはそれが失われないうち、十分に警戒しないわけにはいかないのだ。ヴァイマル共和国の

教訓は、いかに急速かつ不意に自由が失われうるかということをまざまざと示したことにもある。それゆえ、公的に発言できることが変化し、投票先の流動性が高まっていることに鑑みると、こんにちとりわけ注意を払うべきは、自由の理念は容易に手に入るものではなく、また——トーマス・マンが有名な講演「理性に訴える」で述べたように——「ブルジョアのがらくた道具」に墮するものでもないということである。マンがこの講演を行ったのは一九三〇年九月の国会選挙の後、すなわちナチ党が一八%以上の票を得た選挙の後だったが、彼は次のように診断している。「狂信が救済の原理となり、感激が癡癡性の恍惚となり、政治は第三帝国かあるいはプロレタリア的終末論という大衆の阿片となり、理性はその面を覆う」と。

こんにちのわれわれはこれほどの状況に陥っているわけではないが、そもそもここまでの状況にしてはならない。政治的な理性のみが、デモクラシーの危機に対応するための最も信頼できる手段である。また、いわば歴史から飛び出し、歴史的に形づくられてきたものの否定を呼びかける逆方向のカッサンドラ^{†7}の正体を暴くことができるのも、政治的理性なのである。

政治的理性といった概念は、討論や批判に開かれたシステムによって規定され続けるものである。主体間の最低限のコミュニケーションが保障されている場合にのみ、理性的な解決は可能となる。これは理性の啓蒙的な理解だが、実際に近代のデモクラシーは、啓蒙と自由主義に——たとえ歴史的にはそこから生まれたのではないにせよ——太い根をもつのである。いづれにせよ、最低限の政治的理性がなければ、デモクラシーは自滅を定められているのであり、それこそがヴァイマル共和

国の運命が教えるところである。

この点で、現代とヴァイマルとの違いを明確にしておくことは、希望のよすがとなるだろう。現在では、議会制民主主義を最も適切な政治体制とみなすアクターは当時よりもはるかに多い。その限りで、ドイツではポピュリスト勢力の攻撃が、連帯した民主主義者とその団結した前線部隊にぶつかって挫かれるという見込みはまだあるのである。

(アンドレアス・ヴィルシング)

†1 戦後のドイツ連邦共和国は、その首都の名から、

冷戦時代(西ドイツ時代)は「ボン共和国」と呼ばれ、東西ドイツ統一を経て首都移転後は「ベルリン共和国」と呼ばれている。

†2 ナチの語彙では「アスファルト」は、人工的な都会、そしてそこに巣食う根無し草的な知識人を指す罵倒の言葉である。

†3 一九九〇年一〇月三日に東西ドイツ統一が達成されたが、それは、ドイツ民主共和国(東ドイツ)が

「新五州」(メクレンブルク・フォアポンメルン、ブランデンブルク、ザクセン、ザクセン・アンハルト、チューリングゲン)に再編され、ドイツ連邦共和国基本法第二三条に基づき、同共和国に吸収されるという形式をとった。

†4 イスラーム系移民・難民に対する排斥運動・団体。正式名称は「西洋のイスラーム化に反対する愛国的ヨーロッパ人」(Patriotische Europäer gegen die Islamisierung des Abendlandes)で、ペギーダ(Pegida)はその頭文

字。ペギーダは、二〇一四年一〇月に旧東ドイツ地域の古都ドレスデンで行われた、反移民・難民を主張する「月曜散歩」に端を発し、フェイスブックなどのSNSを駆使して参加人数を拡大させ、ドレスデンのみならず、ドイツ各地に広がった。リーダーのルッツ・バッハマンが民衆扇動罪で捕まったり、内部分裂などで一時期活動は衰えたが、二〇一五年秋の難民危機以降、ふたたび息を吹き返した。

†5 トーマス・マンの講演「理性に訴える」は、一九三〇年一〇月一七日、ベルリンのペートーヴェン・ホ

ールで行われた。講演の途中でナチ党員がヤジを飛ばすなど妨害を試みたことが知られている。

†6 翻訳にあたって次の邦訳を参考にした。トーマス・マン「理性に訴える」『講演集ドイツとドイツ人他五篇』青木順三訳、岩波文庫、一九九〇年、一〇七―一三七頁、引用部分は一二二頁。

†7 トロイア王プリアモスの娘で預言者。トロイア戦争の際、トロイアの破滅を予言したが、誰もそれを信じなかった。

第2章 〈政党システム〉

敵と友のはざままで

「ボンはヴァイマルではない」——一九五六年にフリッツ・ルネ・アルマンというスイスのジャーナリストが著したエッセイのタイトルには、強い願いが込められていたが、事実に即したものであった。このタイトルでアルマンは、ボンは決して「ヴァイマル」になつてはならないという連邦共和国初期の自己理解、あるいはその金科玉条を的確に表現した。ドイツ連邦議会に議席をもつ政党の数が増加し、そのなかにポピュリスト的・右翼ナシヨナリストの政党が存在するというだけで、すでにベルリンはヴァイマルと化す危機にあるといえるのだろうか？ 歴史の経験を政治的判断に役立てなくてはならないのはもちろんだが、ひっきりなしに警告を発するのはあまり賢明ではない——ポピュリスト的な過激派たちは、意図的につくり出された脅威のシナリオや破滅のヴィジョンからエネルギーを得ているからだ。

事実、ドイツ連邦共和国の憲法秩序は、いかにして歴史から学びうるのかということの最も印象